

聖書 ● 今日のいのり

市川一宏 (ルーテル学院大学 学事顧問、教授)

1952年東京生まれ、1983年同大学専任講師
2001年より13年まで学長。日本キリスト教社会福祉学会会長、『おめでとう』で始まり、『ありがとう』で終わる人生『福祉とキリスト教』(教文館)、『知の福祉』(人間と歴史社)等、日基教団阿佐ヶ谷教会会員。

「おめでとう」で始まり、
「ありがとう」で終わる人生

どうしてこのわたしが

ノーベル文学賞、ピューリッツァー賞を受賞したパール・バックの『大地』(The House of Earth)は、四〇年以上前になる私の青年時代の愛読書でした。中国を舞台に、当初は貧農であった王龍と妻の阿蘭の波乱に満ちた生活を通して、広大な大地の上で織りなすさまざまな生き方を学んだのでした。干ばつで食べるものも無い飢餓状態にあっても生き抜こうとする姿、南の都市に移動して貧困状態にあつて厳しい労働も惜しまない強い意志、裕福になつても原点である農作物を育てながら生きていこうとする強い信

「わたしの目にあなたは価値高く、貴く
わたしはあなたを愛し あなたの身代わりとして人を与え
国々をあなたの魂の代わりとする。」 (イザヤ書43章4節)

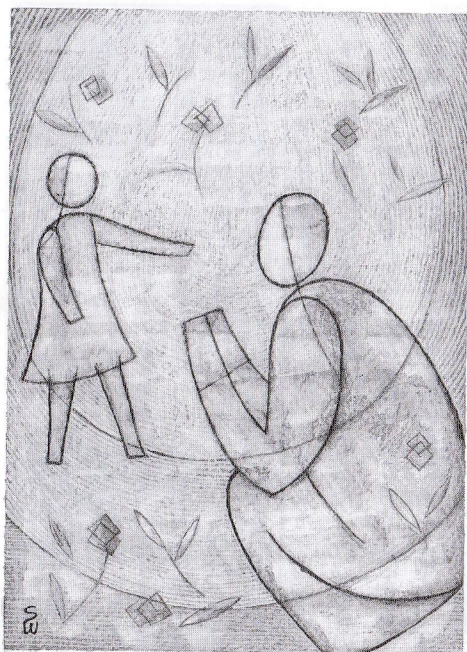
念等から、まだ将来が定まらず、迷いの中にあつた私は、生きていくことへの感動を覚えました。なお、その時は、知的に障害をもつ王龍の一人の娘のことの印象は乏しく、その存在の重さを理解できたのは、それから三〇年以上後になります。

私は、『母よ嘆くなかれ』(伊藤隆三訳、法政大学出版社)を知り、読みました。そこには、パール・バックの思いが書かれています。

「娘が、これから何年たつても子どものままである。という
ことを知ったとき、わたしの胸について出た最初の叫び
声は、『どうしてこのわたしがこんな目に遭わなくてはな

らないの?』という、そうです、避けることのできない悲しみを前にした人はだれもが、昔から幾度となく発してきた、あの叫び声だったのです。(改行)この疑問にたいする答えはありうるはずもなく、じじつ、なにもありませんでした。そして、とうとう絶対に答えがないのだと悟つたとき、わたしは意味のないものから意味をつくり出そう、たとえそれが自己流の答えであつてもよい、答えをつくり出そう、そんなふうに決意したのです。」

「親は、自分の子どもの生命は決して無駄ではない、たとえ限られた範囲内ではあつても、人類全体にたいして重大



渡辺純一画

な価値をもっている、ということを知れば、慰められるはずです。わたしたちは、喜びからと同様に悲しみからも、健康からと同様に病気からも、また利益からと同様に不利益(ハンディキャップ)からも——おそらく後者のほうから、より多くのことを学ぶことができるのです。」

私はふたたび、『大地』(一)(訳者新居格、補訳中野好夫、新潮文庫)を読みました。確かに、王龍と阿蘭は、困難な時も、平安な時も、娘に寄り添い、大切に守っていました。

祝福されて生命を与えられた

私は、障害をもつた子どもをもつ親が、すぐには、障害という事実を受けとめることができないことを学んでいます。障害をもつて生まれたことは、子どものせいではないという重荷を背負い、子どもの行く末を案じ絶望の中に置かれることは少なくはありません。その辛い思いに追い打ちをかけるかのような家族の無神経な発言や、見下ろすかのような周囲の目に、心を痛めるのは当然のことです。

しかし、そのような中であつて、子どもとともに歩む人生を選んだ方々がたくさんおられました。障害をもつ方々を支援する団体の活動に、家族に障害をもつた方がおられる方が関わられていることを知りました。そこで、「わたしの目にあなたは価値高く、貴く わたしはあなたを愛し